

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishi

第3章「他力をたのみたてまつる悪人」

(善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや) から始まる、この「第三章」は、一般的に「悪人正機説」といわれ、宗門の内外を問わず多くの人に、親鸞の思想の中核をなすものとして、よく知られている。しかし、この「善人・悪人」という事柄を、どのように了解するのかといえ、人それぞれの立ち位置によって変わってくる。

(世のひとつねにいわく)。日頃の私たちの常識で考えると、人間心に基づく価値基準による世間の法(倫理・道徳・規律等)を守る人や、出世間の法における善根功德(六波羅蜜・定散二善等)を積む人を「善人」と呼び、それに背く者を「悪人」というのであろう。そこに立つ限り、(悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや)は、誰もがすぐ納得できる。つまり、ここでは、「善人・悪人」が「行為」のみでの了解となってしまう。「善」という行為をする者が「善人」であり、「悪」という行為をする者が「悪人」ということになる。

しかし、『歎異抄』が語る「悪人」とは、「如来の教法」(仏智)によって、言い当てられた「わが身」の事実、私という存在そのものの目覚めのことばであろう。

松本梶丸氏の法話集『知恩報徳』(順教寺発行)に、次のようなお話しがあった。

松本氏が住職を務める石川県の本誓寺には、多くの法宝物があり、夏の一番

暑い時期に四日間の虫干し法要を勤め、それを縁として法話が行われている。その法宝物の中に一幅の恐ろしい目をした「幽霊」の掛け軸があるという。その掛け軸は「三方正面の図」という筆法で、幽霊の軸の前に何十人いても、どこからみても自分ひとりだけを見ているように描かれている。ある時、幽霊の掛け軸の前で、お同行の一人が由来を説明する「お絵解き」をしようとした時、一人のおばあさんがこう言った。「この幽霊は若い女やね」。お同行が「なぜ、この幽霊は若い女とわかるんや」と聞いたら、おばあさんは「ウラんとこの嫁が、この目と同じ目をして、わしを見とる」。

それから三日後、法話をずっと聞いていたおばあさんが、その幽霊の掛け軸の前で、何遍も行ったり来たりしながら呟いた。「ウラ、こんな恐ろしい目をして、今日までうちの嫁を見とったかな」。恐ろしい目をしていたのは「嫁」ではなく、この「わが身」であったと。

これが、「南無阿弥陀仏」の一つの具体的事実であろう。「南無」は、頭が下る、頭の上がりようがない。阿弥陀なる智慧と慈悲は、本当のわが身を白日の下に晒し出す。(煩悩具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて)。よく、「自己を問う」とか、自己自身を「主観ではなく、客観的に見る」という人がいるが、人間のいう客観もすべて主観の範疇でしかない。唯一、客観的事実とは、如来の教法によって、言い当てられたわが身の姿以外にはない。

(他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり)。「他力をたのむ」と「悪人」とは、どこまでも同義語である。「他力をたのむ」、ひとたび本願真実に目覚めれば、常に「自力作善のひと」たらんとする夢想・妄念が根底から破られ(自力のころをひるがえして)、「悪人」なるわが身の事実に帰ることができる。そこに初めて、「地獄一定」の身に、「往生一定」の領きがおこる。その目覚めこそが、「往生の正因」と語られるのであろう。